

しいたげられた天才

小川未明

青空文庫

獣けものの牙きばをならべるように、遠とほく国こつきよう境ほうの方ほうから光ひかつた高たかい山さん脈みやくが、だんだんと低ひくくなつて、しまいに長ながいすそを海うみの中なかへ、没ぼつしていました。ここは、山さん間かんの、停てい車しや場うに近ちかい、町まちの形かたちをした、小ちいさな村むらでありました。

その一軒けんの家いえへ、戦せん時じ中ちゆうに、疎そ開かいしてきた、家か族ぞくがありました。からだの弱よわそうおとこな男おとこの子こが、よく二階かいの窓まどから、ぼんやりと、彼かなた方なたの山やまをながめて、なにか考かんえていました。季節きせつが秋あきにはいると、どこからともなく、渡わたり鳥どりがあかね色の夕ゆう空ぞらを、山やまの上うへ高たかく、豆まめ粒つぶのように、ちらばりながら、飛とんでいくのが見みえました。子供こどもは、鳥とり影かげのまったく空そらの中に吸すい込まれて、見みえなくなるまで見み送おくつていました。やがて日ひが暮くれてしまうと、さらさらと音おとをたて、西にし風かぜが、落おち葉はを雨あま戸どに吹ふきつけるのです。

「お母かあさん、いつ、東とう京きやうへ帰かえるの。」と、子こ供どもは聞きくのでした。

あかりの下したで、冬ふゆの着き物ものの手て入いれをしていた、母は親おやは、

「新しん聞ぶんを見みると、また、二、三日にちまたえ前まえも空くう襲しゆうがあつたそうですよ。私わたしたちが帰かえつても、もうお家うちがないかもしれませぬ。だから、空くう襲しゆうがなくなつてから、帰かえりましようね。」と、さとすのでありました。

こう聞くと、子供は、しかたがなく、おもちゃの木琴を取り出して、鳴らしはじめました。その音は、外の風の声に、かき消されたけれど、子供は、さびしさをまぎらせていました。

いよいよ戦争が終わって、空襲の恐れがなくなると、この家族は、古いすみかへもどっていききました。そのとき、糸の切れた木琴は、ほかの不用になった品物といっしよに、捨てられるごとく、この村へ残されたのでした。

炭焼きじいさんの、孫の秀吉は、よく祖父の手助けをして、山から俵を運ぶために、村端の坂道を上ったり、下ったりしました。そのたびに、ちやうど道のそばにあつた、古道具屋の店さきにかかった、木琴に心を奪われたのです。

「どうでも、おじじにねだつて、あれを買つてもらうぞ。」と、かがやく瞳で楽器を見つめて、こう、ひとり語をするのでした。

しかし、よく働く孫の、この願いは空しくなかつた。ついに、その木琴が、秀吉の手に入つたとき、どんなにうれしかったでしょう。彼は、苦心して、細い針金で、糸の切れたのをつなぎました。糸を強く張つて、ピン、ピンと、ひくと、いい音に、一つ一つ、羽があつて、雲切れのする青い空へ、おどり上がるような気がしました。

山や、谷や、木立までがこの音を聞いて、急に目覚めたものか、いままでに感じないほど、喜びと、悲しみの色を濃くしたのでした。また、雲までが、慕い寄るように、頭をたれるのでした。

「なるほど、いい音が出るのう。しかし、おまえは、不思議な子だ。やっと歩くような小さなときから、あめ屋の太鼓が好きで、その後を追って、迷い子になったことがあるし、水車場のそばを通れば、じつと立ちどまつて、車の鳴る音に耳をすましたものだ。生まれつき、なんでも音が好きなのだ。だれから教わらなくても、こうして、木琴を鳴らせば、いい音色が出るじゃないか。ひとつ、学校の先生のところへ行って、どうしたら上達するか、お話をうかがったらいいぞ。」と、おじいさんは、秀吉の鳴らす、木琴を感じ心して聞き、たばこをすいながらいいました。

「先生に、聞けば、おれが音楽家になれるかどうか、わかるかい。」と、秀吉は、せきこんで、聞きました。

「学校の先生は、オルガンでもピアノでも、なんでも弾きなさるぞ。わからしやらないくて、どうする。」と、おじいさんは答えました。

山へいくときと、反対に道をいって、隣村にさしかかろうとする峠に立つと、あ

たりに、目をさえぎるなものもなく、見晴らしが開けるのでした。盛夏でも、白雪をいただく剣方嶺は、青い山々の間から、夕日をうしろに、のぞいていました。その、こうごうしい、孤独の姿は、いつも秀吉に、なにか限りない、あこがれの感じをいだかせるのでした。そして、これから、彼の訪ねようとする学校は、このとき、ひからびた白い屋根を、目の下に見せていました。

「君は、歌が好きなのか、それとも、音楽が好きなのか。」と、頭の髪を長くして、うしろへなでおろした、まだ若い先生が、聞きました。

「さあ、どちらかなあ。」と、秀吉は、口ごもって、彼は顔を赤くして、最初の質問に、自分がわからなくなりました。

(男は、なんでも、思ったことは、いうのだぞ。)と、祖父の、日ごろのいいつけが、浮かびました。

秀吉は、顔をあげて、先生を見ながら、

「どちら也喜欢なんです。いい音のするものなら、水の音でも、風の声でも、好きなんです。先生、それは、やはり、音楽じゃないんですか。」と、秀吉はしんけんな目つきをして、先生に、ただしました。

「は、は、は。なんでも好きか、なかなか、君は欲ばりだな。しかし、音楽は芸術のうちでも、いちばんむずかしいのだ。天才ならばべつとして、学ぶには、うたうのも鳴らすのも、基礎となる調子から学んで、練習が、たいへんなのだ。ちようど、文章を作るにも、文法を知らないと書けないように、好きだからといって、すぐになれるもんじやないのだよ。」と、先生にいわれました。

このもつともらしく聞こえた、先生の言葉は、秀吉を真つ暗な絶望へつき落とししました。

「好きだけでは、だめでしょうか。」

「まず、だめだな。しかし、君はたいへん熱心だから、せめて、耳だけなりと発達させるといい。僕も、君のことは考えておこうよ。」と、人のいい先生は、まずしげな少年をあわれみながら、こういつて、なぐさめてくれました。

秀吉は、出かけるとき、胸に描いた、桃色の希望の影は、どこかへ消えて、家へもどるときは、失望の底を歩くように、運ぶ足が重かったのです。ただ、先生の考えにおいてくださるという言葉に、はかない望みをかけていたのであります。

その翌日から、彼はまた山へつだいに出かけました。そして谷川の流れへくれば、

いつに変わらずよかつたし、林はやしでなく小鳥こどりの声こえを聞きけば、無条件むじょうけんで自然しぜんが讚美さんびされるの
でした。

「だが、学問がくもんがなくては、まだほんとうのことは、わからぬのだろうか。」と、彼かれは、
急きゆうげんきに元氣げんきがなくなり、氣持きもちちが重おもくなるのでした。そして、いままでのように、自由じゆうに、
無心むしんに、木琴もつきんを鳴ならして、恍惚こうこうとなることができなくなつたのであります。ああ、な
んで自分じぶんが自然しぜんのふところへ、いままでのように、自由じゆうにたのしく入はいることが、悪いわるのだ
ろうか。また、先生せんせいのお言葉ことばを聞きいてから、どうして自分じぶんに、それが許ゆるされなくなつた
のだろうか。

「ああ、芸術げいじゆつの規則きそくなんていうもの、だれが作つくつたのだろうか。」と、彼かれは、まどい、
うたがよい、そして、煩悶はんもんしました。

実直じつちよくな先生せんせいは、けつして、少年しょうねんを苦くるしめようなどは考かんがえなかつた。それど
ころか、願ねがいをはかなえてやろうと、その後、心こころにかけていました。

ある日ひ、先生せんせいはわざわざ、彼かれの家いえを訪たずねて、さぞ、少年しょうねんが喜よろこぶだろうと、吉報きつほう
をもたらしたのでした。

「こんなところが、あるのだがね。N町エヌまちの楽譜店がくふてんで、唄うたや音楽おんがくの好きすきな小僧こぞうさんを

さがしているというのだ。つい、昨日友人から聞いたので、早速知らせにきたが、どうかね。いつてみる気なら、紹介するが。」と、いつてくれました。

秀吉は、よくようすを聞くと、そこへいけば、毎日のように、有名な音楽や、人気のある大家の歌が聞けるので、ぜひ奉公をして、そこで勉強しよう、決心しました。先生からの話とあつて、祖父は、わけもなく賛成したのです。

いよいよ、門出の日がきました。彼は、停車場への道を急ぎつつ、ふり返つて、一日として見なかつたことのない、山々をながめました。雲が出ていて、剣が嶺だけが、隠れていました。

彼は、日ごろ敬慕する山だけに、姿が見えなかつたけれど、別れを惜しむよう、頭を下げました。待つ間もなく、汽車がきたので、意気込んで、それへ乗りました。

「これが、東京へいくのだと、もつといいけれどなあ。」と、思いました。

なぜなら、彼は大きな都会ほど、文化が発達し、芸術が盛んであり、それによって自分を成長させることができると考えたからです。

わずか一時間足らずで、汽車は目的地へ着きました。N町までは、そんな近い距離でしかありませんでした。

だが、そこには女学校あり、中学校あり、また、専門学校があつたから、むろん、喫茶店や映画館などもありました。しかも、彼のいく楽譜店は、この町でもいちばん人通りの多い、にぎやかなところでした。

店は、想像したほど大きくなかつたが、各種の蓄音機や、新型の電蓄がならべてあり、レコードは、終日回転していました。いつも店頭へ人の立たぬことなく、ことに夕暮れどきなど、往來まであふれていました。

秀吉は、いった日から流行歌の楽譜や、歌手の名まえを覚えるのに一苦労でした。制帽をかぶつた二、三人の学生が、店の前に立つて、話をしていました。

「Hは天才だね。なにをうたつてもうまいじゃないか。」

「わけても、エレジーものはね。」

「あれで、美しいと申し分ないがな。」

「いや、目に魅力力があるよ。」

「よせやい。顔だつて、声だつて、Kが一番さ。」

学生たちは、いわゆる芸術家を、芸者かなどのように、品定めしているのです。秀吉はびつくりしたというより、あてがちがつて、別の世界へ飛びこんだごとく、

後悔が先に立ち、とまどいしてしまいました。

あわれな彼は、ひそかに、KとHの、若い映画女優の写真を見くらべたり、また、派手な洋服姿をした人気作曲家の写真などを取り上げて、

「ああ、これが、ほんとうの芸術家というものなのか。」と、いままでの、自分の愚かさを恥しながら、茫然と見つめていました。

そう考えると、先生の言葉が、いまさらのごとく頭に浮かんで、なんのために、自分は、こんなところへきたのだろうか、いくたびとなく後悔されました。そして、ただ自分の野暮がうらめしく、悲しく、気恥ずかしくなると、深いため息をつくのです。

一、二年の後には、天才の芽は、まったく踏みにじられて、あとかたもなく、如才のない、きざな一個の商人ができあがるであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

初出：「白象 第1冊」

1949（昭和24）年11月

※表題は底本では、「しいたげられた天才《てんさい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

しいたげられた天才

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>